大野城市歴史資料展示室　解説シート　考古 No.40

弥生土器２（弥生土器の西・東）

大野城市教育委員会

写真１　大野城市内出土の弥生土器

今から約2500年前頃から1750年前頃まで、日本列島で稲作を始めとする農耕とともに広がった文化を弥生文化と呼びます。弥生文化は、北海道と南西諸島を除く日本列島各地に急速に広がるのに伴い生活様式を変化させました。それを受け入れた各地の人々は、使用する土器を伝統的な縄文土器から変化させ、様々な弥生土器を生み出しました。弥生時代については、近年の発掘調査や研究の成果により、日本中どこでも同じだったわけではなく、各地域ごとに多様な内容をもった弥生文化が花開いていたことが分かってきています。それは各地の人々が、縄文時代以来それぞれの自然環境にあった暮らしのもと築いてきた伝統の上に、新たな弥生文化を受け入れて独自の文化を育てていったからなのです。このような弥生文化の多様性については、弥生土器を見ることで具体的に知ることができます。なぜなら、弥生土器は日常生活に密着し、祭りなどの精神世界の場でも使われたので、各地の弥生文化の特色を色濃く表わしているからです。そこで、この解説シートでは西の九州と東の東海地方の人々に使われた弥生時代中期の土器からその様子を見ていきます。

写真１は九州の大野城市内から出土した弥生土器です。全体的に明るい赤色または白色をしていて、表面には赤い丹（に）が塗られています。種類は壷、甕、鉢があり、どれも表面がきれいに磨かれて、胴は丸みのある形をしています。口の形は、平らで刀のつばのように広がったもの（後列右２点）や内側に丸まりながら立ち上がるもの（前列左）があります。装飾は粘土の紐を一周させた立体的

写真２　静岡県川合遺跡出土の壷文様

な文様があるだけで、全体として飾りが少なくシンプルな印象を受けます。

写真２・３は東海地方の弥生土器です。静岡市川合（かわい）遺跡の墓地からの出土で、色は灰色やうすい茶色で、種類は壷、甕、鉢、高坏があります。写真３左は壷で、下膨れの胴から細くて短い頸が伸びる形をしています。装飾は細い帯状の線が連続して描かれた文様（写真２左）や縄目がつけられた周りを太い線で縁取りした文様（同右）、三角形が連続して描かれた文様などがあり、縄文土器につけられる文様と共通するものもあります。写真３左側後方は甕で、小さな底と広い口が特徴のラッパのような形をしています。表面は板状の工具によって粗く仕上げられており、使われた時のススがついたものがあります。装飾は、口の端を棒によって刻まれた文様や棒で「く」の字が連続するものを胴に描いた文様が施されます。

以上をまとめてみると、西の弥生土器は装飾が少なくシンプルで新たに生み出された土器、東の弥生土器は全ての種類で装飾が多く縄目文様を付けるなど縄文土器の伝統を色濃く残す土器といえます。

(2005.8)

写真３静岡県川合遺跡出土の弥生土器（写真２・３静岡県教育委員会提供）